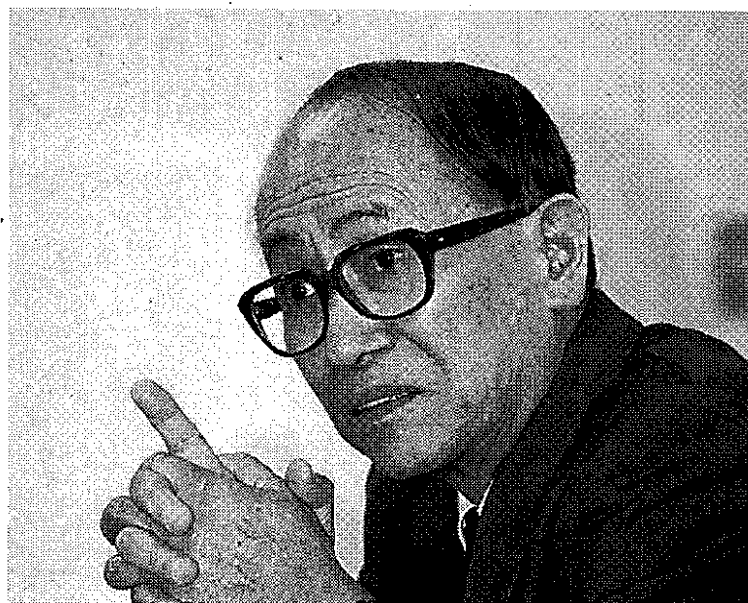


元明治大学長

## 岡野 加穂留さん



「憲法を読むと、ブルースカイを思い出しますよ」と学生に語っていた02年、明治大で、同大政治経済学部提供

おかの・かおる 6月7日死去(がん性脳髄膜炎) 76歳  
7月20日午後1時から東京プリンスホテルでお別れの会

「明日の天気は変えられないが明日の政治は変えられる」。歴史家クロウチェ(伊)の言葉を、趣味の歌舞伎のセリフのような七五調にして著書に付けた。自己変革の哲学を持つとうこの呼びかけだ。

「絶えざる警戒こそ自由の代価」「政治的集団催眠演説」など造語の達人で、啖呵を切る調子だった。子どもの頃は隅田川で泳ぎ、剣道場にも通った江戸っ子だ。明大雄弁部で鍛えた声には、張りがあった。4代前は徳川家の直参旗本だ。

「薩長が江戸を壊したことを、少しは反省していますか」。後に一番弟子になる大六野耕作・明大政経学部教授は「鹿児島出身です」と自己紹介した時、こう言われた。靖国神社に「賊軍」の徳川方が入っていないことにも、人民は平等というデモクラシーの原則に反すると批判。「勝ち組の歴史の象徴」と見ていた。次期首相候補に「また長州の人が出てきそうだね」と困惑顔だったという。

戦後、スイスの哲学者ヒルティの「幸

## 啖呵のように政治を切る

福論」を読み、キリスト教文化を基盤にした信頼や信仰が民主主義を支えていることに感銘して、学者の道を選んだ。

政治家の汚職がほとんどなかった北欧で、福祉国家や社会民主主義を研究したことが学問の原点になった。帰国後、独自に確立したのが「臨床政治学」。政界を「病人の集団」と見立て、首相官邸、国会、議員会館などで精力的に取材した。政治の現実を客観的に考察して、病気の原因を多面的な価値観を反映しない小選挙区制などに求めた。処方箋は新聞や雑誌などで発表し、警鐘を鳴らした。

明大が替え玉受験で揺れた後、收拾役として92年、学長に就任。講義もゼミも続けたのは異例だった。秘書を務めた中岡久・明大企画部調査課長は「持ち帰りの牛丼を学生と楽しそうに食べていました」と振り返る。「顔に青春がある人生を送れ」が口癖だった。明大退職後も、郵政民営化反対などの論陣を張り続け、老いることはなかった。(伊藤政彦)